IPS旅行

International Perimetric Society

大阪市・湖崎眼科

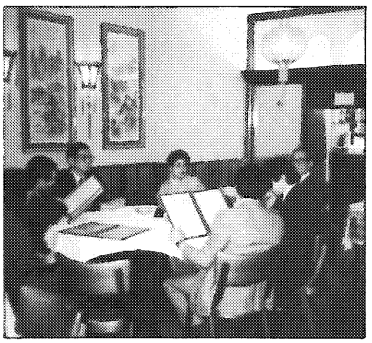
IPS主催、第4回 International Visual field Symposium が4月13日(日)～16日(水)の間、ブリストル（ロンドン西方約150km）で行われました。参加者110人中、日本人は34人（他に少数の同伴者あり）、一般演題62題中、日本からの出題は13題ありました。日本からの主な出席者は、松尾教授（東京医大）、大鳥教授（近大）、東教授（阪医大）、鈴村教授（愛知医大）、松山教授（弘前大）、飯沼（和歌山労災）、中谷（阪厚生年金）、遠藤（東京医大）、可児（兵庫医大）、北沢（東大）、松崎（慈恵医大）等でした。

Octopus を中心とする automatic perimeter が話題となり次回（1982年）のテーマに選ばれました。尚、Fundus perimeter も興味を集め research group が作られる動きにあります。第5回シンポジウムは、1982年10月21日(木)～23日(土)、アメリカのサクラメント（10月30日より国際眼科学会、サンフランシスコ）、第6回シンポジウムは、1984年、イタリアのジェノバで行われる予定です。尚、Goldmann Harms、Dubois-Poulsen は老令のためか欠席し、初代会長の Aulhorn は重篤な病気とのことで欠席し、世代の交替が感じられましたが、会長の Drance、Secretary の Greve が張切り、他に Friedmann、Armaly、Fankhauser の活躍が目立ちました。

①日本にあれば観光名所になりそうなお城のようなブリストル駅

4月13日、早朝、ロンドンのヒースロー空港に着き、国鉄に乗って昼前にブリストルに着く。一見お城のような駅舎に驚く。イギリスは手の込んだ建物がいたる所で見られる。日本にあれば観光名所になりそうな駅。この地方は最近郡制600年記念にエリザベス女王が来られたとのこと。すべて歴史が一桁違う。駅前に東教授（大阪医大）がポーズをつくっている。

②6時までは規則で酒が出せない中華料理店



4月13日、ウエルカムパーティでは充分食べられないだろうと要心して軽く夕食を食べることにし、日本キーラーの田中君が早速見付けた中華料理店へ行く。何時もは外国に来て中華料理とはといって目をむいて怒る中谷君（大阪厚生年金病院）が、今回は何故か黙ってついて来る。外国旅行では普段食べなれたものを見付けて食べるようにするのが旅に疲れないコツと思っている。驚いたことに6時までは規則で酒が出せないとのこと。外国では案外酒にうるさい。大鳥教授（近大）と田中君（日本キーラー）が料理を選び、飯沼先生夫妻（和歌山労災）、広地君（海外産業リサーチセンター）や中谷君が結論待ちの風景。

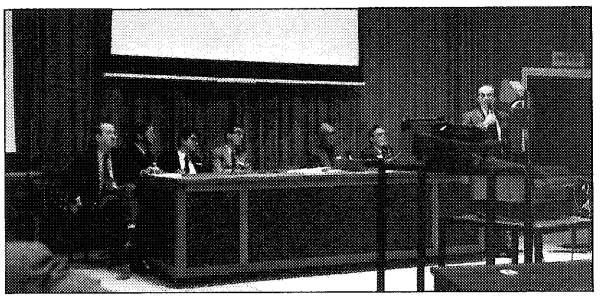
③建物と六〇〇年の歴史に圧倒された市議会ホールでのディナー

4月14日、我々の泊ったロイヤルホテルの真向いに立派な市議会ホールがあり、学会第1日の4月14日夜はそこで晩餐会が開かれる。

この地方は最近郡制600周年記念の祝典を迎え、エリザベス女王が来られた時の様子がホールの中に記録してある。我々はいささか建物と600年に圧倒された感じがあった。宴の前に知己のドランス会長を中心に記念撮影をする。左から飯沼（和歌山労災）、中谷（大阪厚生年金）、木村（阪医大）、北原弟（慈恵医大）、家内、大鳥（近

大)、ドランス会長、松崎(慈恵医大)、東(阪医大)、北原兄(慈恵医大)。

④視野計が話題の中心となったラウンドテーブルディスカッション

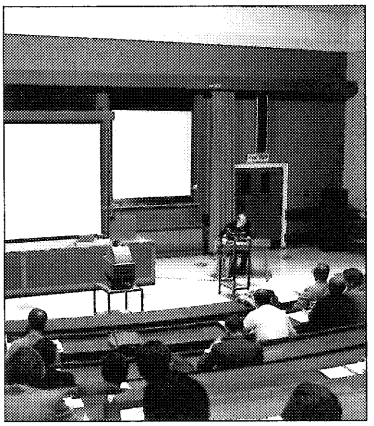


第2日の4月15日午後、ドランス教授(バンクーバー…立っている人)を司会として、左からFankhauser教授(ベルン)、氏名不明、Heijl(ルント)、松尾(東京医大)、Friedmann(ロンドン)、Verriest(ゲント)、Greve(アムステルダム…演台の影で見えない)でラウンドテーブルディスカッションが行われる。自動視野計が話題の中心となる。その中でもFankhauserの考案したOctopus(邦価4、000万円)が一般演題でも、ここでも特に興味を集めた。医療器械のコンピューター化、中でも視野計がその先頭を切るであろうことは時代の流れのようである。次の第5回シンポジウム(1982サクラメント)のテーマも自動視野計となった。

⑤中老以上には、やはり苦手の英会話によるIPSシンポジウム

英会話、国際語としての英会話の普及、同時通訳は、費用の他に、専門語がわからねばならぬという能力の限界のために、英語が国際学会の共通語として使われるようになって20年以上たったようである。

私が最初そのような国際的な研究会に出席したのは、1966年のミュンヘン郊外のチュチングのglaucoma clubのミーティングが最初であった。その時の各国人の英語は、誠におそまつであって、スイスの某教授が壇上で立往生し、下から仲間が英語の単語を教えているような状態であった。しかしながら、英会話は次第に普及して、殊に若い人の間では母国語と同じように自由に話しているが、中老以上の老人には、やはり英会話は苦手のようであり、これは日本だけの現象ではないようである。



日本人の英会話の貧しさは別として、日本人以外では、イタリヤ人がどうも不自由のようである。しかし、これは英会話の貧しさはイタリヤ人の場合には、逆にプラスになっているようで、ユーモラスが倍加されているように思われる。日本人の場合、殊に中年以上の年寄りは、英語が貧しいので、講演の前に誰か達者な人に英文を見てもらった方が安全のようだ。私は近畿大学の大鳥教授に何時も講演の英文を見てもらっている。むしろ、作ってもらっているという方が正確であるが。そうでないと折角の発表がわかってもらえないことになる。

⑥学会主催者のマーミリオン夫妻が王様と女王様になったカルディコット城でのディナー

学会最終日の4月16日は、午後から全員バスに乗り、Bath（町の名）見物をし、夜はカルディコット城でディナーをとる。一種の郷土料理店である。司会者が由緒をウェールズ弁で面白可笑しく説明する。普通の英語も充分わからないのが、なまりの英語は全くチンプンカンプン。学会主催者のマーミリオン夫妻が王様と女王様になり、冠をかぶせられて玉座にすわっている。郷土料理（これが大変な内容）と女性コーラス（例のイギリスの大女ばかりで圧倒される）で最後の夜をかざり、2年後のサクラメントでの再会を約して散会した。

⑦最後のディナーでのフリードマン氏とドランス夫人と私

4月16日の最終日のディナーはカルディコット城での郷土料理。私達夫婦はドランス氏に誘われて、ドランス夫妻、フリードマン氏、グレーブ氏の間に坐らされた。彼等が絶えず話しかけてくれるので答えるのに四苦八苦で食物の味もよくわからない。おまけに、ナイフ1本のみで、フォークがない。サラダも脂でベトベトの羊肉も鴨肉もすべて手づかみ。その指は首にかけたよだれ掛けのようなナプキンで拭けとのこと。おまけにハニーワインが甘くて喉を通らない。舞台では大女の女性コーラスで興ざめ。説明はさっぱりわからぬウェールズ弁の英語。全く大変な一夜であった。

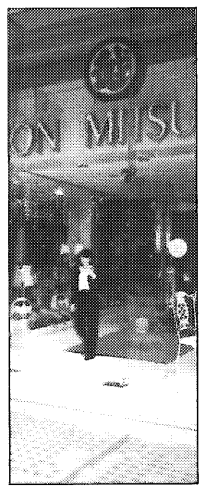
⑧全くすごい迫力のビッグベン英国国会議事堂

4月18日、はからずも、川の中の船中からロンドン見物をすることになった。

川の中から眺めたビッグベン英国議事堂は全くすごい迫力があった。一瞬物がいえなかった。全く堂々としている。最近これ程迫力のある景色に会ったことがない。議事堂ばかりでなく、英国には、大きな手のこんだ建物が非常に多い。最近のアメリカ式のビルのようにどんなに大きくても1～2年もあれば出来てしまうのと違い、このような周囲に彫刻物をかざった大きな建物は恐らく、5年以上かかるのではないだろうか。それを建てるための財力はともかくとして、長時間にわたり、意欲が必要である。その意志の力を考える時、英国のこれ等の建造物は、それぞれが英国人の意志の力の強さを示す象徴のような気がする。ロンドンでこのような建造物にとりかこまれた中に立っていると、英国人ににらまれているような気がする。

⑨近くのダンヒル本店よりも10～20％安いロンドン三越

外国旅行の楽しみのひとつは、いまだにショッピングがある。もっとも日本にも良い物が出来、また、何でも手に入るようになったので、ショッピングの楽しみも少しづつ減って来ているのは残念だが、ロンドンにも三越百貨店が進出しており、日本人のガイドにすすめられて、だまされたと思って三越で買物をした。小規格ではあるが、あらゆる有名店の品がそろっている。



とうとう三越のダンヒルのコーナーで幾つかの買物をしてしまう。数百メートルの先にダンヒルの本店があるというのに。

後からわかったことでは、すべての品物が10～20％、本店の品より安かったのには驚いた。しかも幾らかの品物は日本特有のバーゲンセールをしているので、半値のレーンコート（これは日本での価格の¼になるかもしれない）も手に入れることが出来た。

買い物は、その日の夕方にホテルに届けてくれた。現地の人にいやがられるだろうが、このような日本の百貨店の進出は、日本人には助かる。不自由な外国語を使っては、細かい注文をつけた買物はしにくいので…。

⑩日本の広告がデカデカ、日本と区別がつかないピカデリーサーカス

14年前、世界一周旅行をした時、パリーでも、ロンドンでも、ニューヨークでも盛場の中心にコカコーラの広告があって、写真に写してもどれも同じように見え困ったことがあった。今回、ロンドンの中心のピカデリーサーカスを写してみると、キャノンとフジフイルムの広告がでかでかと出ており、日本と区別がつかないのに驚いた。毎年外国旅行をするたびに、外国のホテルのサービスが低下し、ショッピングするにも買うべき物がなく楽しみが無くなって来たのに気付く。それだけ日本がよくなって来たのだろう。しかし余り派手に広告すると土地の人に嫌がられるかもしれない。心してほしいことだ。

第6回欧州眼科学会に参加して

大阪医科大学医学部眼科
東郁郎

英国西南部のブリストル（BRISTOL）でおこなわれた第4回国際視野シンポジウム（IPS）に出席したあと、松尾教授（東京医大）らのグループと共にエジンバラ(EDIMBURGH)に2泊3日の旅をして、一行とロンドンで別れた後に、ヨーロッパ眼科学会の開催されるブライトン（BRIGHTON）に向った。

実は、エジンバラ－ロンドン間の特急列車が約1時間遅れてキングス・クロス駅(King's Cross)についたものだから、ブライトン行の列車に乗込むために、私と南睦男先生と松本医科器械の総勢5名がハイヤーでビクトリヤ駅（VICTORIA）に馳け込み、間一髪で間に合うという離れ技であった。旅行社の金髪女性が荷物を車から列車まで息をはずませて運んでくれたので大いに助けられた。

こうして約1時間で到着した夕暮れのブライトン駅で、初めて同乗の久富先生（慈恵医大）や太根教授（聖マリアンヌ医大）ら多くの方々と合流することができた。ブライトンは英佛海峡に面した英国保養地の一つで、海岸通りにはホテルがたち並び、宿舎のBEDFORD HOTELでも多くの日本からの参会者と一緒になった。

翌朝、ホテルから徒歩5分で学会場のBRIGHTON CENTERにゆき、登録を済ませた。この会場はビングクロスビーが最後の公演の舞台になったところで、入口ロビーに記念碑があった。半日余裕ができたので、教室の木村君とLONDONに舞い戻ることにして、偶然、DRANCE教授夫妻と駅で会い、1時間を同じコンパートメントで語り合えた。IPSの会長で、BRISTOIでの主役であった教授は、何時も変らず親しみあふれた人柄で、「暇があれば NATIONAL PORTRAIT GALLERYを観ること」を奨めて下さった。2日後、暇を見つけて再度 LONDON に行き、そのGALLERYも観賞したものである。

メインテーマは「角膜」

さて、4月22日午前8時半からMustardé博士の教育講演「眼瞼の形成手術」を皮切りに学会の幕が切って落された。会場はFoyer Hall, Mass Media Hall, Press Room, Room A&Bの5カ所に分れ、別に近くのOdeon劇場

第6回欧州眼科学会場
——THE BRIGHTONCENTER——